

Ⅱ 発掘調査概報

凡例

本書で記載されているコンテナの大きさについては内寸で下記のとおりである。

大コンテナ：42 × 32 × 30cm

中コンテナ：42 × 32 × 20cm

小コンテナ：42 × 32 × 10cm

遺跡位置図に使用した地図は 1 : 50,000 である。国土地理院 2001「数値地図 50000 - 岩手」を使用した。

本書では、遺構名称を簡素化し、遺構名称末尾に付す「跡」を省略する。

(例) 竪穴住居跡→竪穴住居、掘立柱建物跡→掘立柱建物、溝跡→溝

(4) 岩井沢遺跡

所在地 宮古市門馬第4地割65-3ほか
 委託者 国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
 事業名 宮古盛岡横断道路建設事業
 発掘調査期間 平成28年4月8日～8月31日
 調査終了面積 6,500㎡
 調査担当者 村田 淳・伊東 格・澤 美咲
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、JR山田線松草駅から東方約2.2km、閉伊川東岸の狭い河岸段丘上に立地し、調査前は畑地及び林地であった。調査区内は後世の削平によりほぼ平坦になっているが、南北方向に走る旧河道を6条検出しており遺構はその縁辺部で検出されている。調査区内の標高は570m前後である。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居3棟、土坑（陥し穴状遺構含む）50基、炉1基である。出土遺物及び旧河道との堆積関係から竪穴住居は縄文時代後期、陥し穴状遺構は縄文時代前～中期に属すると考えられる。出土遺物は、縄文土器中コンテナ3箱（早・中・後期主体、前・晩期少量）、石器（鎌・鏃・磨製石斧・台石等）約30点、銭貨（寛永通宝）4点である。



遺跡遠景（西から）



調査区全景（北から）



後期の竪穴住居

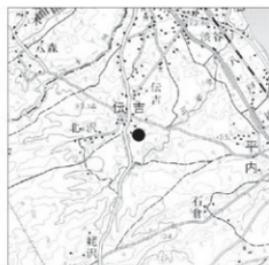


陥し穴状遺構

(5) 北ノ沢I遺跡

(5) 北ノ沢I遺跡

所在地 洋野町種市第45地割地内
委託者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事業名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成28年10月31日～12月20日
調査終了面積 350㎡
調査担当者 村木 敬・立花雄太郎・佐々木昭太
主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場の北西約4mに位置する。東流する沢の右岸に形成されており、標高50m前後の斜面上に立地している。現河床との比高は0.5～3mである。調査前の現況は山林である。

調査の概要

検出遺構は、焼土遺構1基、埋設土器6基、土器捨て場及びそれに伴う遺物包含層である。

出土遺物は、縄文時代前期から中期にかけての土器が大コンテナ75箱、石器が大コンテナ25箱である。

今回、調査で見つかった土器捨て場の存在から、斜面上方の平坦部には縄文時代前期から中期にかけての集落の主体部が存在すると思われる。調査は次年度も継続を予定している。



遺跡遠景

(6) サンニヤ I 遺跡

所在地 九戸郡洋野町種市第25地割33-1地内
 委託者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事業名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成28年7月4日～10月1日
 調査終了面積 4,400㎡
 調査担当者 八木勝枝・村木 敬・森 裕樹・佐々木あゆみ
 立花雄太郎・佐々木昭太
 主要な時代 縄文・近代



遺跡の立地

遺跡は、九戸郡洋野町種市第25地割33-1に所在し、川尻川右岸の舌状丘陵突端から中央緩斜面地標高46～56m地点に立地する。現況は山林である。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居4棟、貯蔵穴2基、土坑4基、炭窯3基、焼土遺構7基、陥し穴状遺構27基である。

出土遺物は、後期初頭土器を中心に大コンテナ1箱、石器中コンテナ1箱である。遺物の大部分は竪穴住居覆土及び包含層から出土している。

検出した竪穴住居3棟は後期初頭期に相当し、「コ」の字形に組まれた石囲炉が設置されていた。うち2棟には貯蔵穴1基が隣接し、竪穴住居との関連が考えられる。

本年度調査区に南接する平成27年度当センター調査区では陥し穴状遺構が20基、東接する県生涯学習文化課調査区では7基調査されており、サンニヤ I 遺跡では合計54基を数える。川尻川対岸の南川尻遺跡でも11基調査されており、川尻川沿い一帯で狩りが行われていたと考えられる。



調査区全景



後期初頭竪穴住居



陥し穴状遺構調査風景

(7) サンニヤⅢ遺跡

所在地 九戸郡野野町種市第25地割地内
委託者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事業名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成28年9月15日～12月16日
調査終了面積 14,000㎡（調査対象面積 32,800㎡）
調査担当者 八木勝枝・高橋義介・菊池貴広・森 裕樹
佐々木あゆみ
主要な時代 縄文・弥生



遺跡の立地

遺跡は、九戸郡野野町種市第25地割に所在し、川尻川右岸の標高52～65m地点に立地する。調査区は北端が最も高く標高65m程度、そこから標高52m地点まで斜面地となり、中央部は緩やかな谷底、南端は再び斜面地となっている。現況は山林である。今年度は本線部分14,000㎡を調査し、来年度は中央部～南端の西側地点を調査する予定である。

調査の概要

検出遺構は、土坑4基、陥し穴状遺構39基、焼土2基、炭窯2基である。

出土遺物は、縄文時代前期及び弥生時代中期～後期土器破片大コンテナ1箱、石器類中コンテナ6箱である。石器は石鏃、石匙、片面調整打製石器などがある。

主な検出遺構は陥し穴状遺構である。調査区北側斜面地標高54～56mに列状に配置され、その列上方にも階段状に配置されている。中央谷地点には3基並ぶものが数か所確認できた他、点在している。

陥し穴状遺構は、川尻川下流右岸に位置するサンニヤⅠ遺跡ではこれまでに54基調査されており、川尻川一帯で狩りが行われていたと考えられる。



調査風景



土坑



連なる陥し穴状遺構

(8) 北鹿糠遺跡

所在地 九戸郡洋野町榎市17地割字北鹿糠
 委託者 国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
 事業名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成28年10月3日～12月7日
 調査終了面積 3,600㎡
 調査担当者 杉沢昭太郎・伊東 格・澤目雄大
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場から南西方向へ約1.5kmの山地にあり、標高は75～70mを測る。調査前は山林であったが、それ以前は果樹園であったという。

調査の概要

検出遺構は、何れも縄文時代の竪穴住居1棟、陥し穴状遺構11基、土坑6基、焼土4基である。

出土遺物は、縄文時代の土器が大コンテナ4箱、石器が大コンテナ6箱である。

昨年度の調査で陥し穴状遺構が複数確認されたことにより、本遺跡は縄文時代の狩猟場であることが分かった。今年度も陥し穴状遺構は11基検出され、尾根上から北側斜面部を中心に分布する傾向があった。陥し穴状遺構は何れも平面形が長楕円形を呈し、長軸で3～4m、深さも1.4m前後あり残りが良かった。また今年度は石斧が多数出土し、その中には未完成のものも多く含まれていた。加えて原石や石斧製作に使われた石器類も出土したことから、隣接する小河川から原石を採取し石斧製作を行う場であったことも明らかになった。その時期は出土した土器から後期初頭～前葉や前期前～中葉と推察される。竪穴住居は後期と見られ直径3mに満たない小形で簡素な造りで、短期的な利用であったことを窺わせる。



竪穴住居（北から）



調査風景（北から）



陥し穴状遺構（南から）

(9) 宿戸遺跡

所在地 九戸郡洋野町種市第6地割地内
委託者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事業名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成28年4月6日～7月22日
調査終了面積 0㎡ (調査対象面積 10,200㎡)
調査担当者 八木勝枝・趙 哲済・森 裕樹・佐々木あゆみ
主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、九戸郡洋野町種市第6地割に所在し、海岸から450m、標高35～53mの丘陵上に立地する。現況は山林である。来年度調査継続予定である。

調査の概要

調査区南端から精査を始め、精査終了遺構は、竪穴住居1棟、焼土4基、土坑18基、陥し穴状遺構1基である。

出土遺物は、縄文時代早期～中期土器破片大コンテナ13箱、石器類中コンテナ74箱である。石器は石鏃、石匙、片面調整打製石器などがある。この他、コハク原石、古銭が出土している。

今年度調査は7月22日で中断し、調査区の大部分は未精査である。調査対象面積10,200㎡中9,050㎡は重機による粗掘りまで完了している。残り1,150㎡は飛び地で調査未着手である。8,130㎡には遺物包含層が認められ、トレンチでは竪穴住居等遺構を確認している。今年度の粗掘りでは大きなコハク原石が出土した地点もあり、集落の存在が想定される。来年度調査は包含層及び遺構精査を中心に行う。



調査開始時全景



竪穴住居



調査風景

(10) 小田ノ沢遺跡

所在地 洋野町種市第3地割地内
 委託者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事業名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成28年7月25日～10月27日
 調査終了面積 3,900㎡
 調査担当者 村木 敬・立花雄太郎・佐々木昭太
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、洋野町役場の南東約7mに位置する。遺跡が形成されている丘陵は、東流する2条の沢に挟まれており、東方へと張り出している。標高は47～53mであり、調査区中央付近が最も高く、東に向かって徐々に下がっている。調査前の現況は山林である。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居14棟、土坑60基、柱穴状土坑8個である。竪穴住居は平面形が不整形、不規則な柱穴配置に留まり、炉跡などは認められなかった。

出土遺物は、縄文時代前期の土器が中コンテナ4箱、石器が中コンテナ9箱である。

遺跡は、頭頂部に竪穴住居、北側の斜面に規模の大きな土坑群が形成された縄文時代前期の集落であることが判明した。



遺跡遠景

(11) 芦ヶ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡

所在地 九戸郡久慈市長内町第17地割地内
委託者 国土交通省東北地方整備局南三陸国事務所
事業名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成28年4月6日～9月8日
調査終了面積 11,250㎡
調査担当者 菊池貴広・高橋義介・河村美佳
主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、久慈市役所の南西約4.6kmにあり、丘陵地縁部の東及び北緩斜面に立地している。標高は80～90m前後である。調査前は山林となっていた。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代前期前葉の竪穴住居10棟、陥し穴状遺構71基、土坑5基、柱穴状土坑2基、焼土遺構17基、炭窓5基である。竪穴住居の形状及び規模は、方形・楕円形を呈し径3.5×3.5mの小型のもの、長方形を呈し長軸約13mのもの（いわゆるロングハウス）が検出された。これらの竪穴住居には、埋土に十和田火山起源の中振テフラが確認された。陥し穴状遺構がこれらの竪穴住居を截ることから、集落跡から狩猟場に変遷した遺跡であったことが明らかになった。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ4箱、石器中コンテナ2箱である。土器は主に縄文時代前期前葉であるが、縄文時代早期前葉から中葉の土器も出土した。



調査区全景

(12) ^{かみしろかわ}上代川遺跡

所在地 九戸郡野田村大字玉川第5地割地内
 委託者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事業名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成28年4月6日～12月8日
 調査終了面積 8,000㎡
 調査担当者 北田 勲・佐々木清文・阿部明義・大泰司統
 川村 英・河村美佳・藤田崇志
 主要な時代 縄文・弥生・古代・中世・近世



遺跡の立地

遺跡は、三陸鉄道野田玉川駅から西約500mに位置しており、丘陵の南向き緩斜面と低地部分に立地している。現況は山林で、標高は35.0～65.0mである。

調査の概要

検出遺構は、縄文時代の土坑14基・陥し穴状遺構17基・遺物包含層1,000㎡、弥生時代の竪穴住居30棟・土器埋設遺構2基・土坑14基・焼土40基・遺物包含層1,000㎡、古墳末～奈良時代の竪穴住居2棟、古代末～中世の製鉄炉を伴う工房6棟・鍛冶炉2基・土坑4基・木炭焼成遺構40基・排滓場2箇所・溝跡1条、近世以降の墓坑4基、縄文～現代の旧河道1箇所、出土遺物は縄文前期・弥生前～後期の土器大28箱・剥片石器大4箱・礫石器大25箱・土偶1点・土製耳栓1点・スタンプ形土製品2点・ミニチュア土器3点・石剣1点、古代の土師器小1箱・土製紡錘車1点、古代～中世の羽口中45箱・炉壁中150箱・鉄滓土のう1,700袋・砂鉄中5箱・炭化物中25箱、近世以降の墓石4基分・煙管3点・鎌1点・釘ビニール1袋・土人形1点・人骨2体である。

今回の調査で、主に縄文時代には狩り場、弥生時代には集落、古代末～中世には製鉄が営まれていたことが分かった。特に、古代末～中世と考えられる鉄生産関連の遺構が複数検出され、製炭から砂鉄を原料とする製鉄（製錬）までの一連の作業がすべて確認できた。製鉄炉は、これまで三陸沿岸部で確認している構造と異なり、粘土を貼った前庭部を伴う自立炉を有している。また、排滓場のうち中央は、面積280㎡・厚さ1m弱の規模があり、製鉄作業で炉から排出された鉄滓や炉壁、羽口などが多量に包含されていた。今後の整理作業で、炉の構造や排出された鉄滓などの分析、各種遺物の観察などを行い、これまで確認されなかった古代～中世の三陸沿岸北部における鉄生産を考えたい。



調査区全景（南西から）



製鉄炉を伴う工房と排滓場（南から）

(13) 長途遺跡

(13) 長途遺跡

所在地 下閉伊郡普代村第19地割字白井91番地1・93番地9
委託者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事業名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成28年9月16日～12月16日
調査終了面積 2,800㎡
調査担当者 米田 寛・鈴木貞行・久保友咲
主要な時代 縄文・弥生



遺跡の立地

遺跡は、普代村役場の北北西約4.2kmに所在し、南東方向に国道45号と北緯40度運動公園野球場が隣接する。リアス式海岸の段丘上に位置し、標高は100～104mで現況は山林である。

調査の概要

検出遺構は、堅穴住居5棟（縄文前期4棟、弥生後期1棟）、土坑11基（縄文前期）、陥し穴状土坑8基（縄文）、性格不明遺構3基（縄文前期）、焼土7基（縄文～弥生）、縄文前期遺物包含層1箇所（約400㎡）である。

出土遺物は、縄文土器大コンテナ27箱、弥生土器小コンテナ02箱、石鏃・槍先型尖頭器・石匙等の剥片石器が小コンテナ3箱、磨製石斧・特殊磨石・敲石等の礫石器が中コンテナ6箱、弥生時代後期の土製紡錘車1点である。



調査区全景

(14) 力持遺跡

所在地 下閉伊郡普代村第16地割字天拝坂地内
 委託者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
 事業名 三陸沿岸道路
 発掘調査期間 平成28年9月5日～10月1日
 調査終了面積 130㎡
 調査担当者 星 雅之・佐々木清文・溜 浩二郎
 主要な時代 縄文



遺跡の立地

遺跡は、三陸鉄道北リアス線普代駅の北約2km、力持海岸から西に約1.5kmに位置し、扇状地性斜面の東向き緩斜面にある。調査地の現況は道路、標高は約58mである。今回の調査地は、平成13～15年度の調査地を縦断する旧村道直下部分に相当し、また平成26年度調査地の南東側に近接する。

調査の概要

検出遺構は、竪穴住居1棟、柱穴状土坑4個で、全て縄文時代に帰属する。竪穴住居は、想定される平面形状などから中期と推定される。出土遺物は、縄文土器7袋（4号ビニール袋で換算※縄文前期前葉～中期後葉）、石器9点（※石鏃、スクレイパー、コア、磨石）である。道路建設時の盛り土から出土した。

今回の調査地は、旧村道建設時にほぼ全面にわたり地山まで削平した後、盛り土が施されていた。竪穴住居は、削平の深度が浅かった部分において、壁の僅かな立ち上がりを検出し、認知した。遺存状態は悪いものの、力持遺跡の南東端付近における居住域の広がりを知る上で新情報を提供すると評価される。遺物は、出土土器を見る限り縄文前期前葉～中期後葉まで確認され、加えて大木式土器と円筒式土器の両方が認められる。この状況は、過去の調査内容と同じ様相にあり、道路建設時の盛り土は遺跡周辺から運ばれたと判断される。



力持遺跡全景（上が西）



調査区全景（北から）

(15) 高根遺跡

所在地 宮古市山口第11地割71ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
事業名 三陸沿岸道路
発掘調査期間 平成28年4月7日～10月17日
調査終了面積 2,300㎡
調査担当者 西澤正晴・河本純一・中島康佑ほか
主要な時代 縄文



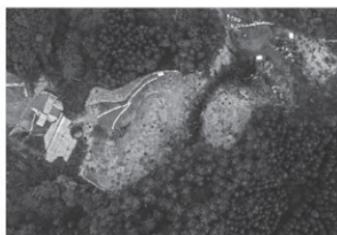
遺跡の立地

遺跡は、宮古市役所から北西29kmにあり、山口川に面した北上山地からつづく丘陵の先端に立地する。調査地は、複数の尾根とそれに挟まれた谷部に及ぶ。標高は60～100mの間にあり高低差に富んでいる。調査前の状況は山林や畑地であった。これまで宮古市教育委員会によって過去に2度調査が行われており、縄文時代中期の集落や墓域として知られている。

調査の概要

今年度調査した遺構には、竪穴住居49棟、フラスコ状土坑183基、製鉄炉2基がある。調査は今年度も含め3年にわたっており、おもな遺構の合計は、竪穴住居は約100棟、フラスコ状土坑500基以上となる。各遺構は、標高60mの谷底から標高100mの尾根上部、その間の南向き急斜面上にある。谷底と頂上部との比高は40mもあり、この範囲に各遺構が途切れることなく広がっている。谷底から斜面下位にはおもに竪穴住居が、斜面中位から尾根頂部にかけてはフラスコ状土坑が立地している。遺構の時期は、出土遺物などから、大部分が縄文時代中期に属すると考えられる。この遺跡の最大の特徴は、急峻な地形に立地し、また数多くの貯蔵穴（フラスコ状土坑）を有することである。調査するにも困難な立地でありながら、多くの遺構が構築されることはこの時期の特徴の一つと考えられる。

今年度出土した遺物には、土器大コンテナ25箱、石器中コンテナ35箱などがある。3年間の合計数は土器が大コンテナ340箱、石器100箱、そのほか（土製品、骨貝類など）約大20箱である。出土遺構としては約7～8割が斜面下位から谷底にかけて広がる4箇所を含む層からの出土である。



高根遺跡全景写真



斜面地での調査